

レッドサンブラッククロス全短篇

目次

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～30頁までを収録したものです。

ページ操作について

● 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。

もし、誤操作などで表示画面が真途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

● 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。

● 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

戦艦〈ヒンデンプルグ〉の最期	9
勇者の如く倒れよ	55
予備士官	171
塹壕にて	187
新戦艦建造に関する往復書簡	213
少し遠い場所	231
九九九艦隊計画概論	263
ある中尉の戦死	289
戦艦	321
標的は〈大和〉	329

飛鳥の征けぬ空はなし	369
交戦規則	397
海底戦隊〈隼〉	409
七二七高地の争奪	429
市民討論	445
法務大佐かく語りき	457
フリードリヒ大王最後の勝利	465
主力戦闘戦車論・断章	479
喪失第一号	499
宇宙英雄ヴァルター・ケーニヒ	507

ルール・ブリタニア	517
最後の一人まで	545
夜桜は散った	555
乗艦命令	571
オデュッセウスの靈廟 <small>れいびょう</small>	581
看過せず	607
ペリカンはいつも血を流す	631
佐藤大輔、仮想戦記を語る	655
解説 高梨俊一	665

図版一覧

〈兵器〉

紀伊級	471
V号中戦車H型パンテルII	491
七式中戦車	493

〈地図〉

ニューヨーク沖海戦 1950年12月27日0500～	53
〈北ノ暴風〉作戦： ドイツ軍の予定針路と枢軸軍（日本軍）の兵力配置	91
ノルウェー沖海戦（第10日）1951.3.6.1315～1615	127
〈北ノ暴風〉作戦 1951.3.6～7の展開	143
ベルファスト沖海戦 1951.3.7.0320～0340	157
〈北ノ暴風〉作戦： 枢軸軍の反撃とドイツ高海艦隊の突撃 1951.3.7.0300～	165

〈図表〉

〈北ノ暴風〉作戦：戦闘序列（1951年2月現在）	89
日英米枢軸軍・欧州〈奪還〉艦隊： 戦闘序列（1951年2月現在）	117
〈北ノ暴風〉作戦における両軍主要艦艇数比較	131

装幀
山影麻奈

レッドサンブラッククロス全短篇

戦艦
〈ヒンデンブルグ〉
の最期

Episode - 25

“HARIMA” versus “von HINDENBURG”

Down of the Battleship era, Dec., 1950.

1 接触

大クワリーグスマリリネ
大ドイツ帝国海軍潜水艦隊北米艦隊所属の潜水艦、U
四九八二がマイアミの根拠地から一九五〇年最後の戦闘
哨戒に出動したのは、二週間前のことだった。X.XV⁴
C型潜水艦に属する彼女は、約五週間の作戦航海能力が
あるから、戦闘時の燃料消費と帰路のことを考えるなら
ば、そろそろ帰投すべき時期になっている。前の大戦で
は燃料・食料の洋上補給を行なって作戦日数を延ばすこ
とも出来た。だが、今度の大戦では幾つかの理由からそ
れもほとんど不可能になっている。現在時は、一九五〇
年二月一七日午後三時。すぐに帰投したとしても、敵
の空爆から彼女を守るマイアミのコンクリート製ブンカ
ーへの到着は新年に入ってからになるだろう。
「一体なんなのだ、こいつは」
U四九八二艦長、ブルーノ・ストランスキー大尉は海
図を睨んだまま呟いた。彼がいるのはU四九八二の頭脳
である発令所、その海図台の傍らだ。様々な航海／戦闘
用指揮装置が詰め込まれ、一〇人近い将兵が配置につい
た発令所の内部は、ひどく狭苦しい。

「潜望鏡を突き出して見ればわかるんでしようが」彼と
一緒に海図を見ていた前任将校がやはり呟くように言っ
た。

ストランスキーは褐色の髭で埋まった口元を歪めて答
えた。「それが出来れば苦労はない。だが、日本人が捜
索レーダーを回していないとは思えんしな——しかし、
このまま確認もせずに立ち聞きしている訳にもいかん。
やってみるか」

それだけ言うと、彼は髭をゆつくりとしごいた。士官
候補生時代、何人ものキールの娘達に刺繍を編むことを
決意させた顔立ちを持つ彼だが、入浴など考えられもし
ない二週間の航海と艦長としての重圧の影響を受け、今
の顔つきは不健康そのものだ。

今、その不健康な彼の顔つきをさらに悪化させている
のは、一時間前に航走音を探知した正体不明の敵水上部
隊だった。U四九八二の聴音器——パッシヴ・ソナーが
五隻の艦艇からなると思われるその集団航走音を探知し
たのは、作戦海域DNの南西端。一般的な呼び名に置き
換えるなら、キューバ島とイスパニオラ島を隔てるウイ
ンドワード海峡のカリブ海側だ。
もちろん、この海域で敵を発見したこと自体は何もお

かしくない。キューバ南端のグアンタナモには、日米英枢軸軍がカリブ海周辺に持つ最大の根拠地が存在するからだ。そこは北大西洋における彼らの唯一の拠点、アイスランドに兵員・物資を送り込む船団の集結港湾でもあるから、付近を敵艦が航行しているのが当たり前でさえあった。日本、合衆国本土西岸、豪州から出港した輸送船は、強襲上陸作戦によって奪回されたパナマ運河を抜けた後、グアンタナモに集結、そこで、大西洋を突破する船団を組むからである。

今のストランスキーが疑問に感じているのもその点ではない。

彼は口元を逆Vの字にすると、傍らの鉛入り防音カーテンをめくり、ソナー室に入った。そこにはレシーバーを頭に着けた三人の水測員がおり、自分が担当しているソナーに緊張した顔付きで取り付いている。ただし、探信儀——アクティヴ・ソナーの発振は行なわれていない。現在、U四九八二は無音潜航態勢をとっている。水測員達は、音波の圧電効果を利用する聴音器で、海中を伝わってくる音を捉えていた。

ストランスキーが背後に立った気配を察した水測員が報告した。

「変化なしです。隻数は五隻。うち四隻は駆逐艦。相変わらずグアンタナモへの針路を一五ノット前後で進んでいます。現在位置は本艦の正艦首二時方向、距離約一〇海里」彼の声は、艦長よりさらに小さかった。「音響伝播は悪くありません。カリブ海にしては珍しいです」

彼はレシーバーの片側だけをずらして耳から外し、艦長に視線を向けた。

「いまのところ、敵が本艦に気付いている兆候はありません」先程より、さらに小さな声だった。

誰もがこのような調子で話すのは、潜水艦にとって、音が最大の敵だからだ。潜水艦最大の武器は相手から見づかりにくいという点にある。第二次大戦の頃、潜水艦が探知される理由は水上航行中にレーダー等で見つかる場合がほとんどだった。当時の潜水艦は、いざという場合に潜航が可能なだけの軍艦、可潜艦に過ぎず、作戦期間の大半を海上で過ごしていたからだ。

しかし、第二次大戦終結から八年——第三次大戦勃発からはほぼ三年が過ぎた現在、探知を被る主因は、駆逐艦のパッシヴ・ソナーで航走音が聞き取られることになっている。

変化の原因は技術の発展だ。潜水艦は新たな装備や機

関——海中から水上に突き出した煙突といふべきシュー
ーケルや無酸素機関によって、潜りつばなしで行動する
ようになった。

一方、駆逐艦の方も、低周波・大出力の艦首アクティ
ヴ・ソナーと聴音限界デシベル数が大幅に向上したパツ
シヴ・ソナーを装備するようになっていた。それに——
ここ数年で実戦化された対潜ホーミング魚雷によって、
水上と空中の敵を気にしているだけで良かった潜水艦は、
さらに、探知能力の高い敵潜水艦をもライヴァルに加え
ねばならなくなっていた。U四九八二が、カリブ海の深
度一五〇メートルの海中を進んでいるにもかかわらず、
やり過ぎと思われるほど息を潜めていた理由はそうした
あれこれの影響だった。

「ハンター・キラーかな？」

と、ストランスキーは尋ねた。敵が良く出撃させてい
る対潜攻撃グループのことだ。

水測員は首を振った。「いえ、おそらく水上打撃戦任
務部隊です。駆逐艦が出しているキャヴィテーションの
パターンが、日本の艦隊駆逐艦のものですから」

スクリュー・プロペラを回転させた場合、必然的に発
生する泡、それが水圧によって潰れた時に発生するパル

ス・パターンのことを言っている。艦が装備したスクリ
ューの形状により、そのパターンには指紋と同じような
特徴が存在し、それによって艦を見分けることが出来る。
「ですが、残りの一隻は判りません。かなりの大型艦な
のは間違いありません。音から考えて——四軸推進です
から」

ストランスキーは軽く肯いてから尋ねた。

「速力を上げてても、探知は続けられるか？」

「蛙飛びなら」と、水測員は言った。短時間高速航走
してから、機関停止、聴音探知、目標確認後、再び高速
で追跡——という動作を繰り返す戦術運動のことだ。ア
メリカン・スタイルの表現を用いるならスプリント・ア
ンド・ドリフトだ。

ストランスキーは発令所に戻った。蛙飛び前進を命じ
る。「電池群回路解除、モーター停止。ヴァルター・タ
ーピン、クラッチ入れろ。現深度を速力一五ノットで三
分間進み、その後、潜望鏡深度まで浮上する」

命令を聞いて、先任将校が少し不安そうな顔をしたが、
何も言わなかった。ストランスキーの命令を実行した場
合、敵に探知される危険は確実に増すが、現状の探知を
継続していても、これ以上得ることはないからだ。距離

が開き過ぎており、このままでは、こちらが確認する前にグアンタナモへ入港されてしまう。攻撃を行なうならば、もっと近づかねばならない。危険を冒して、潜望鏡で目標を確認しなければならぬ。

「アウロル燃料、燃料弁開ける。燃料漏出の有無を確認。ヴァルター・タービン、出力三分の二」先任将校は命じた。

艦尾から、機関音が伝わってきた。

腐蝕を起こさぬように、特殊処理を施されたタンクから、アウロル燃料——高濃度過酸化水素水——が触媒室に送り込まれて化学変化を起こし、酸素と蒸気に変わった。続いて、そのガスは、燃料が噴射されているタービンへ流れ込み、燃料を燃焼させ、艦を水中で高速に行動させるに足るエネルギーを発生させた。

一九三八年秋、キール軍港の潜水艦隊司令部をブルーノ・ヴァルターという名の学者が訪れて以来、大ドイツ帝国海軍が鋭意開発を進めていた無酸素推進システム、ヴァルター機関。それは、ここ数年で、ドイツ潜水艦の大半を水中高速艦へと変貌させていた。実際、前大戦時の潜水艦ではほぼ不可能と言っていた一五ノットの水中速力を出そうとしているU四九八二の最大水中速力は、

二二ノットに達するのだった。

「機関長が喜んでいます」と、先任将校は言った。「アウロル用燃料タンクのパッキングが怪しくなっていましたからね」

ストランスキーは諦念を感じさせる鼻息をもらした。

ヴァルター機関は水中高速力を保証すると同時に、おそらく危険なシステムでもある。高濃度過酸化水素水は物騒な液体で、ほんの僅かでも漏れ出したが最後、ちよつとした火花によつてさえ引火し、艦を爆沈させてしまう。最近のドイツ潜水艦が、洋上での補給が不可能になつている主な原因はそれだ。洋上で補給用潜水艦から受け取る燃料として、高濃度過酸化水素水は余りに危険な物質なのだつた。

実際、燃料の引火誘爆によつて失われた潜水艦は、期間をここ数年に限ってさえ二〇隻近い。一時期、やはり潜水艦用主機関としてヴァルター・タービンの開発に熱意を示していた日本人が、やがてそれを諦め、主開発対象を莫大な費用を必要とする反応推進へ切り替えてしまったのも無理はなかった。これほど危険なシステムを平然と採用出来る者は、技術に対して妙に凝り性などところのあるドイツ人以外、存在しなかった。

数分後、ヴァルター機関を停止させたU四九八二は、次の運動の準備にかかっていた。

水測員が報告した。「敵水上部隊、本艦の正艦首一時方向にあり。距離約六浬。ドップラーシフトおおむね変化なし。本艦現針路とほぼ直交する方位に移動中。速力約一五ノット。ああ、これは……」

ストランスキーは素早くカーテンをめくり、水測員に尋ねた。

「どうした？」

「大型艦の、機関音が妙です」と、水測員は言った。「妙に甲高い音です」

「損害を受けているのか？」

「いえ、そうではないと思います。ですが、この種の機関音は聞いたことがありません」

「確かめてみれば判るさ」

発令所に戻ったストランスキーは命じた。

「先任、潜望鏡深度」

「ヤー、潜望鏡深度。潜横舵上げ。キングストン弁開け。メイン・タンク・ブロー。クラッチ外せ。電池群直列。

回路繋げ、モーター回せ」先任将校は命じた。電池で行

動する命令を出したのは、潜水艦用タービンの動力伝導システムは、スクリューを逆転させられる機構を持っていないからだ。微妙な運動を行なう場合、電極の切り替えだけで事足りるモーター推進の方が適している。

両舷から、タンクに圧搾空気が吹き込まれる轟音が響いた。

ストランスキーは落ち着かない様子で深度計の赤い針を見つめた。おそらく、これまでの高速航走と今のメイン・タンク・ブローで、敵は本艦を確実に探知しただろう。急いで敵の正体を確認し、攻撃するのか、逃げるのかを決定しなければ。

胃潰瘍になりかねないストレスを肉体に及ぼす数分間の後、針が深度一五メートルを示した。先任将校が報告する。「艦長、潜望鏡深度。ツリム取ります」

幾つかの操作が行なわれ、U四九八二は海中で静止した。

ストランスキーは二つある潜望鏡のうち、艦尾側のそれに近づいて命じた。

「捜索用潜望鏡上げ。急速潜航に備えよ」比較的小型のドイツ潜水艦は、日本や合衆国の潜水艦とは違い、司令塔から潜望鏡をのぞくように造られていない。すべての

指揮システムが発令所に集中している。

油圧装置が作動し、潜望鏡のアイピース部が目の高さまで上がってきた。

ストランスキーは潜望鏡のグリップを開くと、目をアイピースに押しあて、そこに映しだされる光景に意識を集中した。広角レンズがはめ込まれた捜索用潜望鏡は視界が広い。海上ばかりではなく、空もいくらか見えた。潜水艦にとり、有難くない天候——晴天だった。

ストランスキーは両手両足に力を入れ、潜望鏡を素早く回転させた。一瞬、遠くの海面に何かが見えた。慌てて回転をとめ、それを十字線の中心に据える。軍艦らしいことは判るが、どんな艦かは判然としない。ストランスキーは潜望鏡の倍率を切り替えた。艦内に自分の目撃しているものを伝える。

「水測、良くやった。敵艦は五隻。日本艦だ。駆逐艦は対潜用ではない。アキヅキ級か——その改造型だな。デカブツの方は……」

そこまで言ってから、彼は絶句した。他の艦と、その大型艦の比率が妙なことに気付いたのだ。

しばらくしてから、ストランスキーはうめいた。

「なんだ、あれは」

その敵艦が戦艦であることは間違いなかった。だが——大き過ぎる。形態は一昔前に建造されたヤマト級に似ているが、ヤマト級はあれほど大きくない。大体、ヤマト級は主砲塔を四基も備えてはいない。煙突の形も、蒸気タービン、あるいはディーゼル艦にしては妙だ。ストランスキーの記憶には、あのような日本戦艦は存在しなかった。

艦長に代わって潜望鏡をのぞきこんだ先任将校にも、それが何か判らなかつた。

「判りません、新型ですね。ヤマト級とキイ級の特徴が混ざっています。主砲は少なくとも五一センチでしょう。喰いますか？」

最後の問いにストランスキーが肯きかけた時、水測員から新たな報告が入った。

「本艦の後方に航走音！ 距離不明。おそらく敵潜水艦。発射管注水音聞こえます」

ストランスキーは叫ぶように命じた。「潜望鏡下げ！ 急速潜航！ 主ベント開け、潜横舵、下げ舵一杯！」

「敵艦、魚雷発射。雷数二。探信音複数聞こえます。おそらくホーミング」

「アルベリッヒ発射」ストランスキーは額に汗を浮かべ

て命じた。カルシウム・カーバイトを詰めた円筒のことだ。その物質は海水に触れると激しい化学反応を起こし、アセチレンの泡を大量に発生させる。うまくいった時は、敵の音響追尾魚雷をそちらにそらしてしまう効果がある。「探信音確認。一つはそれました。他の一つは依然本艦を追尾中」

「畜生。ヴァルター・タービン回せ。機関両舷全速。クラッチ繋げ。潜横舵水平、取り舵一杯。モーター停止、電池群回路切れ」

「ヤー」
ストランスキーは次々と命じながら思った。クソッ、日本人はつい数カ月前まで対潜魚雷を持っていなかった。おそらく米英と共同開発したのだな。それにしても、一五ノットで走っていた俺達を追尾していた潜水艦とはどんな機関を搭載しているのだ。俺達と同じヴァルターか？

同時に彼は、おそらく自分の艦が魚雷を避けきれないであろうことを確信していた。

船体外殻を低い音が叩いた。

水測員が報告した。

「命中音聞こえます。深度は本艦と同程度」

「片付けたようですね」と、先任将校が言った。

艦長の響大佐は答えた。

「危ない所だったよ」左手で、火のついていないパイプをいじりまわしている。「本艦でなければ、追尾は不可能だったからな」

まだ青年といて良い顔立ちの先任将校は尊敬すべきヴェテラン艦長に同意した。

彼らの乗っている潜水艦は、日本が建造を開始した最新型の伊号七〇〇型（註）に属する一艦だった。第二次大戦前から日本へ亡命していたユダヤ系物理学者たち——その数は、英本土陥落、第三次大戦による合衆国の崩壊でますます増加した——が産・学・軍の総力を結集した極秘プロジェクト、〈D計画〉へ参加した結果開発された動力源、反応タービン機関。伊号七〇〇改型一番艦（実用反応動力潜として通算した場合、八番艦）にあたるこの艦は、それを搭載したことで、水中速力二六ノットの発揮が可能な高速潜水艦として誕生した。ドイツのようにヴァルター機関へ妙な執着をもたずにいたことが、この新機関の採用を可能にしたのだった。潜超改一型が実戦に参加したのは、今回が初めてだった。何もかも、高濃

縮ウラニウムのおかげという訳だった。

響大佐は尋ねた。「他に反応はないな？」

「ありません」先任将校は答えた。

「ふん、じゃあ、海上の連中に言つてやれ、もう少し気をつけろ、と」

大ドイツ帝国海軍がU四九八二の喪失を確認したのは、それから二日後のことだった。U四九八二は自分達が発見したものについて報告を行なう間もなく撃沈されたから、彼らが何を見たのか、何によって撃沈されたのかをキールの司令部や北米艦隊が知ることはなかった。ただ単に、日米英枢軸軍の対潜戦術の進歩に伴って上昇カーヴを描いている喪失潜水艦のリストに、新たな艦名が加わることになっただけだった。

2 北米艦隊

合衆国東部、ヴァージニア州ノーフォーク。ドイツ式の呼び名で言うならば、北アメリカ戦線ノイエス・ドイッチェラント大管区ノーフォーク軍港には、大ドイツ帝国海軍北米艦隊の生根拠地が置かれている。

かつて合衆国海軍の根拠地だったここに、ハーケンクロイツの軍艦旗をなびかせた艦隊の司令部が置かれているのは、いくつかの歴史的偶然に左右された結果だった。最も注目すべき遠因と考えられるのは、日露戦争であった。この戦争はロシア第二太平洋艦隊の全滅で勝負がついた筈だった。だが、その後、大陸でロシア陸軍が大反撃に転じたため、日本帝国にとっては満足のいかない結末を迎えてしまった。作戦能力の限界に達していた日本陸軍は、ロシアの反撃に耐えきれずに敗退し、遼東半島の一部を保持するのがやっとという状況で停戦を迎えたのだ。

この陸での苦い結末は、新興覇権国家たる日本帝国のその後の進路に大きな影響を与えた。この国は、独立を維持するため、同盟を結んでいた英国、そして戦費を提供していた合衆国との関係をさらに深めねばならなくなつたのである。陸軍の発言力は地に落ちていたから、日本は、親英米派と海軍によって主導される国家として成長することになった。

陸での敗戦が日本に与えた経済的な影響は大きかった。大陸経営を諦めねばならなくなつた日本は、その後、貿易国家として生き残りを図らざるをえなくなつていった。

からだ。

こうした事実が、一九三九年に勃発した第二次大戦に大きな影響を及ぼした。開戦時、度重なる貿易摩擦により合衆国と日英の關係は極端に悪化していた。このため、ドイツに攻撃された英国にとつての味方は、遠く極東にある日本以外、存在しないという事態を引き起こしたからである。

合衆国からの援助がないのでは、一九四〇年、英国がその本土を失ってしまったのも無理はなかった。孤立した英国を救うには、日本は余りにも遠すぎたのだった。英国を打倒したドイツは、一九四一年春、後顧の憂いなくバルバロッサ作戦を開始。途中で何度か危機はあったものの、一九四二年秋、モスクワを陥落させ、スターリンの失脚したソヴェエトとの間に休戦を結んだ。第二次大戦は、ドイツの大勝利に終わったのだ。

無論ドイツの——一九四三年、ヒトラーは国名を大ドイツ帝国に改称した——戦争がそれで終わった訳ではなかった。いまやピレネーからウラルに至る広大な国境線を抱える超大国となったドイツは、無数の国境紛争に対処しなければならなかった。加えて、カナダとオーストラリアに逃亡した英国政府（未だにチャーチルによって

指導されていた）は、特殊部隊の破壊工作と無差別潜水艦戦という手段で対独戦を継続していた。

ヒトラーの命令を受けた大ドイツ帝国陸軍參謀本部が、カナダ侵攻作戦（赤の場合Ⅱ）の立案を完了したのは一九四五年春のことだった。ヒトラーは直ちにこれを承認し、日本との経済摩擦がこじれにこじれた反動で必要以上に親独的になつていた合衆国から局外中立の約束を取り付けると同時に、その準備と明年春の作戦開始を命じた。

一九四六年春、西欧の工業力とロシア、中東の資源全てを投入して建設された侵攻部隊がカナダ東岸に押し寄せた時、英国には、それに対抗すべき手段は残されていなかった。彼らに可能だったのは、カナダの奥行きを深さを利用した防衛戦を展開すること、艦隊主力をオーストラリアに逃亡させること、これだけだった。チャーチルは日本の参戦を望んだが、それは実現しなかった。東京オリンピックを契機として経済発展の速度をさらに加速させていた日本といえども、北米大陸で長期作戦を行なえるだけの軍事力を持っていなかったからだ。大体、既に日本は、英国から要請されてインドへ防衛用の兵力を派遣していたのである。

結果、カナダ侵攻作戦は順調に進展した。一九四七年の秋までには、北米に展開したドイツ軍の兵力は八〇万を超え、東部沿岸とその内陸部を二〇〇キロ以上の縦深で占領していた。カナダの主要地域は、ドイツの完全占領下に置かれたのだ。

この時期になって、合衆国はようやく危険に気付き始めた。彼らは、自分達の国に、国境の向こう側にある八〇万の独軍に対抗する軍事力がないことを理解し、恐怖したのである。

合衆国はヒトラーに撤兵を求めた。だが、すべては遅すぎた。両国の関係は悪化し、既にヒトラーは、翌年春に開始される予定の合衆国侵攻作戦——（金の場合^{ゴールド}）の準備命令を発動していた（同時に、対日作戦（黄の場合^{イエロー}）のII）の発動も命じていた）。

一九四八年五月、五大湖とアパラチア山脈の間を抜けて合衆国主要工業地帯にドイツ北米総軍が殺到した。第三次大戦が勃発したのである。だがその時、独軍を阻止できる戦力は合衆国には存在しなかったのだ。

ヒトラーが合衆国の東部諸州を支配下に置くために必要だった時間は、それからわずか半年であった。合衆国は五大湖工業地帯とワシントンの死守を図ったが、その

計画は、A4中距離^R弾道^B弾による反応^M弾攻撃がワシントンとノーフォークへ行なわれたことで、大混乱に陥った。やがて、元来親独的だった南部諸州が合衆国からの離脱を宣言し、ドイツと単独停戦を結んだ結果、計画は完全に崩壊した。

危機に瀕した合衆国を救ったのは、一九四八年末、インド洋での危機的状況をようやく脱した日英軍が申し出た軍事同盟だった。その時までには、二〇世紀の大国として将来の世界を支配する筈だった合衆国は、膨大な数の国内難民と壊滅した経済、そして恐るべき敵を抱える三等国へ転落していた。

U四九八二が消息を絶つてから数日過ぎた一九五〇年一月十九日、ノーフォークに在泊していたのは、ドイツ帝国海軍北米艦隊の主力とあって良い、二〇隻以上の艦艇群だった。

艦隊旗艦は、（フォン・ヒンデンブルグ）。計画時、H45と呼ばれていた超々^{トミヤウ}弩級艦だ。

軍港は冬の朝を迎えていた。空は鉛色の雲に覆われている。ここしばらく続いている寒波の影響で、あちこち

に白い物質が積もっていた。(ヘンデンブルグ)の広大な甲板にも、早朝の甲板掃除の努力を無に帰す冷たいそれは降り積もっている。

(ヘンデンブルグ)艦長、オットー・フォン・レヴィンスキー大佐は、後甲板から港内の情景を眺めていた。ドイツ東方騎士団に連なる古い家柄の出であるレヴィンスキーは、それを証明するかのような高い鼻と、洗練された顔立ちを持つている。ただし、やはり貴族の出身であるから、必要以上に厳しくはない。どこかに、柔らかな雰囲気があった。気温が零下に下がっているため、その独特な顔立ちの彼が息を吐く度、葉巻を吸っているかのような水蒸気が口元から発生していた。特に機嫌の良い時、あえてあみだに被ることにしている制帽は、目深に被られている。

ノーフォークは祭りの準備を整え終わっているようにレヴィンスキーには思えた。この地域の軍政を行なっているのはナチ党員ではなく、海軍であるため、町の情景は比較的豊かさを感じさせるものだった。ゴルゴダの丘で現世的な死を迎えた男の誕生日を祝うため、街中に飾り付けが行なわれている。かつてこの軍港都市に対して

使用された反応兵器の傷跡はどこにも見えない。それは地上ではなく、軍港の置かれた湾内で爆発したからだ。レヴィンスキーは視線を港内に移した。そのあちこちに、北米艦隊の武勲に溢れた艦艇群が停泊していた。

巨大な(ロスバツハ)。彼女は大戦劈頭(へきとう)にインド洋で沈んだ(フリードリヒ)の姉妹艦だ。そして、彼女よりさらに巨大な五〇・八センチ砲艦(フォン・モルトケ)。その他にも、かつて〇級と呼ばれていた巡洋戦艦(バルバロッサ)や、空母(イエーデ)の姿が見える。

大ドイツ帝国海軍の中で、北米艦隊ほど武勲の誉高い艦隊はない。一九四八年の開戦以来、この艦隊は日米英枢軸軍との間で何度も激戦を展開していたのである。ことに、開戦劈頭の合衆国大西洋艦隊撃滅と、日本参戦後の、護送船団襲撃任務における戦果は素晴らしいものだった。

レヴィンスキーの(ヘンデンブルグ)は、この艦隊に参加した、最も新しく、そして最も強力な水上戦闘艦だった。

彼女は全長三五〇メートル、基準排水量一四万八〇〇〇トンに達する巨艦——というより怪物——で、人類が建造した史上最大の船であった。基本的な艦型はピスマ

ルク級の拡大型で、(ビスマルク)をほぼ一・五倍の全長にした(ただし、排水量は三倍)艦だと思えばイメージ的に間違いがない。

本来、この艦はフリードリヒ・デア・グロッツセ級(H級)の一艦として建造される筈だった。つまり、四九口径四二センチ砲八門を備えた戦艦としてだ。

しかし、日本がドイツの建艦計画に対抗して一九三九年にスタートさせた九九艦隊計画に五一センチ砲搭載の紀伊級が含まれていることが判明した結果、計画は変更されることになった。なにしろ日本の計画は、旧式戦艦九隻(金剛級、長門級、加賀級、高千穂級)の大改装、超大型空母九隻(翔鶴級、大鳳級、改大鳳級)の新造に加え、大和級二隻、信濃級二隻、紀伊級二隻、正体不明の七号艦級三隻の完成を目指す大計画だったからである。

計画変更は、ヒトラーじきじきの命令だった。彼は、紀伊級に対する恐怖に加え、やがて名前だけは判明した七号艦級の超々々弩級戦艦——いわゆる播磨級を恐れた日本が、この戦艦を建造するために、九州の新設海軍工廠と呉工廠に巨大な建造ドックを建設した事実が判明したからだ。国防軍防諜部の報告によれば、それらのド

ックは並の戦艦なら四隻同時に建造できる幅と奥行きを持つていたのである。日露戦争以後、日本が成し遂げた経済発展は、それを可能にするだけの経済力を日本に与えていたのだった。

ヒトラーはH級の建造を四隻で取りやめ、より強力な戦艦を建造するよう、命じた。

総統の不安に対し、当初、ドイツ海軍当局はやや鈍感であった。彼らが最初に提出した設計案は、(フリードリヒ)から(クネルスドルフ)に至る四隻の設計を改良したH42——基準排水量九万九〇〇〇トンの五〇・八センチ砲戦艦だった。ヒトラーはこの計画に一応の承認を与え、一番艦を(フォン・モルトケ)、二番艦を(フォン・ファルケンハイン)と名付けるように命じた後、さらに強力な艦を——ドイツの軍事力そのものを象徴する戦艦を一隻、建造するように厳命した。彼はまだ満足していなかったのだ。

こうして、(フォン・ヒンデンブルグ)が誕生したのだ。ヒトラーは毎年提出される新たな設計案を拒み続け、ようやく彼が(播磨)に対抗できると納得したH45設計案を承認したのである。それは、四九口径五三センチ連

装砲塔四基八門、両舷合計一八基の一五センチ連装砲、三〇基に達する一〇・五センチ高角砲を基本的な武装として備えた最大威力二八ノットで走る真正正銘のモンスターであった。

レヴィンスキーは、その怪物を昨年^の就役以来指揮していた。

彼は第一次大戦初期に士官候補生として海軍に入隊し、軍人一家である生家の伝統を継いだ。最初に乗り組んだ巡洋戦艦〈デルフリンガー〉でジユトランド海戦に参加して以来、大艦巨砲は彼の人生そのものであり、〈ヒンデンブルグ〉艦長職はその経歴の絶頂であった。既に二万トンの敵輸送船を撃沈した功績から言つて、彼がやがて現在以上の階級に昇進するのは未来の必然だったが、彼個人としては、世界最大、最強の巨砲戦艦艦長としての現在が、最も満足^ののゆくものであった。

残念なのは、その満足すべき現在が終わりにかけていることだった。既に〈ヒンデンブルグ〉の艦長職について二年近い月日が過ぎており、慣例から考えて、明年初頭に彼の昇進、転勤が発表されるのは確実だった。おそらく、軍令本部勤務だろう。あるいは砲術学校の校長かも

しれない。重要な配置であることは確かだが——巨艦を意のままにすることに比べると、ひどく魅力に欠ける。軍人であるからには無論甘んじて受け入れるよりないが……気分は晴れなかった。

もつとも彼の気分を重くしている材料はそれだけではなかった。もうひとつ、より切実で残酷な現実というものがあった。〈ヒンデンブルグ〉ほどの巨艦を有するにも拘らず、北米艦隊は落日の運命にあるという現実であった。

「日本人は、カリブ海に続々と艦艇を送り込んでいます」

数日前、陸上に置かれた艦隊司令部の会議室で開かれた定期状況検討会議で、情報参謀はそう言った。

「連中は彼らの言う所の聯合艦隊司令部をハワイに前進させました。これは、彼らが明らかにアメリカ戦線重視へ戦略転換したことの証明です。ちなみに、現在北米には使用可能なA10弾道弾と反応弾頭は存在しませんからハワイは我々が手出しできる場所ではありません。もちろん、A4では届きません」

「それはいい。どのみち、反応弾は使えないのだ」艦隊

司令官、ハイエ中將が言った。

「レイキャヴィクに敵の戦略爆撃部隊がおる限り、反応弾はないものと考えた方がよい」

室内にいた参謀と艦長達は、口々に同意のうめきを漏らした。

偉大たるべき大ドイツにとり、アイスランドのレイキャヴィクに築かれた日米英枢軸軍の一大根拠地は、目の上のコブだった。いや、それ以上に厄介な存在、胸に突き付けられたナイフといつてよかつた。

当初、中立であつたためドイツの攻撃を免れ、独立を保つていたアイスランド。この小国は、枢軸軍がパナマ運河を奪回した翌月、彼らの別働隊によつて奇襲占領された。ヒトラーは直ちにこの島の奪回を命じ、不可能なら、新型の「アメリカ・ミサイル——A10弾道弾による反応弾攻撃を行なえと命じた。

だが、その計画は実行されることはなかつた。

レイキャヴィクの飛行場に、日本の戦略爆撃航空団が展開を開始、ヒトラーを慄然とさせたからであつた。

レイキャヴィクへ展開した日本統合航空軍第六三三爆撃飛行隊は、欧州全土を航続距離に納める成層圏爆撃機「富嶽改」で編成されていた。そして、一九四七年に亡

命してきたアインシュタインの助言を受け入れた日本が反応弾の開発に成功したことは、世界の誰もが知つてゐる。一九四五年にその開発に成功して以来、ドイツだけが独占してきた反応弾はいまや、完全に魔力を失つたのである。ヒトラーはレイキャヴィクを無力化するため空軍に継続的爆撃を命じていたが、最近ではそれも空しいものとなりつつある。日本が、世界を半周できる——つまり世界のいかなる場所も爆撃できる——新型戦略爆撃機（飛鳥）の開発に成功、最初の実戦航空団を編成しつつあるという情報が伝えられたからであつた（もつとも、これはドイツ側の誤断で、〈飛鳥〉は未だに試作段階だつた）。

「今後、我々の活動は困難を増してゆくことでありましよう」と、情報参謀はあえて事務的に言つた。「これまでも我々がレイキャヴィク向けの護送船団を自由に叩けたのは、日本の正規空母群がそれを妨害しなかつたからです。彼らはパナマにいましたから」

参謀は手元の資料をめくり、続けた。「しかし、奴等（やつら）はあの恐るべき機動部隊をグアンタナモに前進させました。数カ月以内に、船団護衛、あるいは我が艦隊そのものの撃滅に出撃してくることは明白です」

誰かがきつい声で言った。「しかし、何の抵抗もできん訳ではあるまい。一応、我々にも空母はある。上空直掩^{ちゆうえん}が得られるなら、敵機に手もなく捻^{ひね}られてしまうことはない」

「確かに」情報参謀は軽く咳払いした。「おそらく、我が艦隊を直接攻撃にくる敵艦載機には大損害を与えられるでしょう。(ロスバツハ)以上の艦は撃沈されないかもしれません」

「では、何が問題なのだ」

「補充能力の差です」情報参謀は断定的に言った。「日本人はかつてあれだけ戦艦を建造していたにもかかわらず、現在は空母中心の海軍を作り上げています。これに対し、我々は日本並みの空母機動部隊を未だに建設出来ていません。連中は艦載機を失っても、後方から予備を持ってくるだけですみます。おそらく、それに必要な時間は長くて二週間でしょう。それに対して、我々が戦艦に損害を受けた場合——」

「過去の経験から考えて」と、レヴィンスキーは口を挟んだ。「修理には二カ月以上かかる。その間に、港でやられてしまふ」

「ああ、その通りです」参謀は軽く肯き、続いて視線を

周囲に泳がせ、他にも何人かが口を挟もうとしていることに気付いた。彼は口ごもった。この場にいるほとんどの者が彼より上位の階級にある。

「諸君」突然、ハイエ中將が口を開いた。この場のやりとりの何もかもが嫌になったらしかった。彼は、艦隊が直面する現実をあげすけな表現で要約した。

「はつきりしているのは、我々の夏は過ぎ去ってしまったということなのだ。秋と冬に耐える覚悟を固め給え。以上だ」

雪の後甲板。会議の情景を回想していたレヴィンスキーに、伝令が駆け寄ってきた。

「艦長、司令部よりの至急報です」

彼は電文用紙を受け取った。そこには、枢軸軍の大規模護送船団がグアンタナモで編成を完結、二波に分かれて出撃しつつある、との情報が記されていた。時間的な要素から考えて、大西洋上の適当な地点で迎撃するためには、直ちに撃撃しなければならぬ、ということだった。

レヴィンスキーは子供の頃、クリスマス朝の早朝、クリスマスツリーの根元に見覚えのない玩具を見つけた時の

気持ち悪い出した。あの頃、誰に何も言われなくとも、それが自分のものと判るのはなんとも言えない感覚だった。いかに貴族出身といえども、彼の生家はそれ程裕福という訳ではなかった。召使の一人さえ置けない程だった。だが、彼の両親——特に、第一次大戦で巡洋艦艦長としてフォークランド沖で戦死した父は、息子の教育費と玩具代を出し渋るような下卑た了見はかけらも持ち合わせていない男だった。その意味において、レヴィンスキー家はやはり完璧な貴族階級ユンカの一員であった。レヴィンスキーは微かな笑みを浮かべて伝令に言った。「副長に伝えてくれ給え。出撃準備、全乗員上陸取り消し、非常呼集だ」

素敵なプレゼントだ。うん。我々は秋を迎える前に、もう一度夏を楽しめるといふ訳なのだ。素晴らしい。無意識のうちに、彼は制帽を被りなおした。

3 船団

第二次世界大戦が始まるまで、船団護衛は日本帝国海軍の得意技に含まれてはいなかった。日本人が作り上げていた艦隊は、あくまでも短期決戦用の、迎撃型のもの

であった。その理由はまことに正直なもので、明治維新以後の日本は、国力から考えて、長期戦にはとても耐えられそうになかったからだだった。艦隊決戦にも大艦巨砲にも、それなりの裏付けがあったという訳である。

しかし、丸三年（第二次大戦から数えるならば一〇年）近いドイツとの戦いが、その状況を大きく変化させていた。開戦後約一年間、インド洋で敵潜水艦と苦しい戦いを繰り返した結果、帝国海軍は英海軍の助言を以前よりさらに素直に聞き入れるようになっていた。

九九九艦隊計画における最後の戦艦二隻の建造は中止された。現在、日本が建造している艦艇は、タンカー、輸送船、対潜駆逐艦、潜水艦、護衛空母が主力である。もちろん、最初のもの程優先順位が高い。例外的に力が注がれているのは正規空母だが、これは、太平洋とインド洋で枢軸軍の優位を獲得したものが航空機であることを考えるなら、至極当然の建艦方針だといえた。

一九五〇年二月二〇日午後、グアンタナモを出港し、港外で陣形を組みつつあるSY-3A護送船団コシノボイ。その往路における護衛部隊の主力は、日本帝国海軍海上護衛総隊の第一護衛隊だった。旗艦は、いささか古びてきた重

巡（利根）で、その下に軽巡（矢矧）、（大淀）、松型駆逐艦八隻が配されている。彼女たちはここ数カ月にわたってSY船団——対レイキャヴィク護送船団——の護衛に当たってきたヴェテランであり、それ以前はインド洋でそれを行なっていた対潜護衛作戦のエキスパート集団であった。

天候が悪化しだしている洋上で、国籍も違えば速度も操船の特性も違う三〇隻の輸送船やタンカーが苦勞して陣形を整えていた。彼女達の船腹には、レイキャヴィクの枢軸軍兵力が必要としている燃料、食料、弾薬、装備、そして分解された航空機が、一杯に詰め込まれていた。絶え間なく信号がやりとりされ、船団指揮官の乗った輸送船の信号手達は、瞬きする暇さえ与えられない程だった。海軍と違って、商船船長達は陣形を組むことに慣れていないのだ。彼らの大半は日米英の予備役海軍士官だったが、現役を離れてから随分と時間が過ぎていた。

（利根）の艦橋に立った護衛隊司令の大井篤少将は、その情景を冷めた目で眺めていた。彼は、この船団が余り被害を受けずに目的地へ到達できるであろうことを確信している。

確信の理由は、敵に与えられた反応時間、その短さである。

インド洋での苦い経験から、日本帝国海軍は、余りに大規模すぎる船団はかえって悪い結果をもたらすことに気付いていた。

大きな——例えば六〇隻で編成された船団は、平時なら何でもない針路や速度の変更にも極端な手間がかかる。

このロスタイムは致命的なもので、敵潜水艦や航空機、水上艦に連携攻撃を行なう余裕を与える。船団戦術の持つ護衛兵力の経済的使用、船舶生存性の向上という利点が、ロスタイムによって打ち消されてしまうのだった。

このような経験から日本が編み出した新たな船団戦術は、一つの船団を比較的小ぶりの二波の船団に分け、時間的に数日の期間を空けて航行させることだった。

経験を活かした改善だけあって、新戦術には様々な利点が存在していた。

例えば、第一波船団につける護衛は普通程度の対潜護衛部隊だけでよい。なぜなら、大規模すぎない船団なら敵水上艦が追い付く前に、レイキャヴィクの制空権内へ逃げ込むことができるからだ（針路、速度変更にかかると時間が短いためである）。これは同時に、敵潜水艦に集

結する時間を与えないことも意味する。恐るべき敵潜水艦の集団攻撃——狼群戦法ウルフパックも余程運が悪くない限り回避可能という訳だ。大規模護衛部隊を必要としない理由はそういうことだった。

問題なのは第二波だ。この船団は敵が警戒している中を進むことになるから、危険は最初の船団より高い。

しかし、水上艦、航空機の襲撃に備えた護衛部隊を付けておけば、危険は減少する筈だった。航空機は護衛空母でなんとか対処出来るし、場合によっては戦艦すら参加している護衛隊に挑戦してくる敵水上艦はそれ程多くない。潜水艦については、同一コース上を進んだ第一波が盾の役目を果たすおかげで、大きな被害を受ける心配はなかった。近海の潜水艦は、第一波船団への攻撃で、魚雷をあらかじめ射ち尽くしている筈だからだ。仮に敵が新たな潜水艦を投入してきたとしても、危険が極端に増す訳ではない。第二波船団にも第一波と同程度の対潜護衛艦艇は付けられているし、レイキャヴィクに配備された護衛部隊に第一波を手渡した第一波護衛部隊が、航路の最も危険が増す場面で第二波に合流するからだ。

こうした理由から、最近の船団は、二波に分かれて——SY・3を例にとるなら、SY・3AとSY・3B

に分かれて——航行するようになっていた。現実にも効果が上がっている。今年に入って、枢軸軍輸送船の損害は、明らかに減少傾向を辿っていたのである。

〈利根〉の前方を、星条旗をなびかせた松型駆逐艦が駆け抜けた。壊滅した合衆国海軍を再建するため、日本から合衆国に供与された二〇隻の駆逐艦のうちの一隻だ。大井少将の護衛隊に所属する松型駆逐艦のうち、何隻かはそういう艦だった。それぞれ、星条旗やホワイト・エンサインをなびかせている。〈利根〉からは見えないが、ダヴィデの星を掲げた艦も一隻加わっている。ユダヤ人達には、もう一度マサダマサダに立てこもるつもりはないからだだった。

見張員が報告した。

「船団指揮船より信号ッ！ 陣形完成、貴官ヨリノ指示ヲ待ツ」

大井は背後に立っていた参謀長に合図した。

大井の耳に、参謀長の声が聞こえた。「通信参謀、護衛隊各艦に伝達。各艦五分以内二定位置へ付ケ。続いて船団指揮船に信号。一〇分後、航行開始。船団速度八ノット」

大井は思った。さて、始まりだ。この戦争のおかげで、我が海軍は、海軍の本來あるべき姿——商船護衛は全てに優先する——を実現することが出来た。だからこそ、一度は崩壊しかけたインドの戦線を立て直すことが出来たし、パナマを奪い、日本人の誰もが軍事的対象として考えたこともなかったアイスランドに基地を設けることだつて出来た。

今回はどうなるかな、彼はそう思った。敵は、通商破壊戦——特に、水上艦艇を用いたそれ——で不利になりつつあることに気付いている。果たして、こちらの読み通り、効力を失う前に水上艦隊を使いきろうとするだろうか。うまくいって欲しいものだ。そのために、我々の三日後に出港するS Y・3 B船団には、聯合艦隊れんごう艦隊から特に駆り出してきた増援部隊が付けられているのだから。

4 発見

枢軸軍護送船団の大西洋における主な航行ルートは二種類ある。北米大陸東岸に沿って流れるメキシコ湾流上を進むコースと、大西洋の中央を、ややアゾレス諸島よりに進むコースだ。時間の点から言えば、アイスランド

に向けて流れる海流に乗る前者の方が良い。安全面から言えば、もちろん後者だ。距離の問題から考えて、北米から出撃してくるドイツ側水上艦の脅威をほとんど無視できるからだ。

出撃を命じられた時、レヴィンスキー大佐が最も気にしていた点はその点だ。仮に敵がアゾレス諸島よりのコースをとった場合、(ヘンデンブルグ)による迎撃は不可能になつてしまうからだ。グアンタナモに日本を主力とする枢軸艦隊が集結しつつある現状では、北米艦隊が本土東岸をガラ空きにすることは出来ない。

だが、出撃の五日後、船団の追尾と襲撃に向けられた十数隻の潜水艦から入った報告を総合すると、

「敵船団第一波ハ、ばみゆ、だ諸島西南一二〇浬ヲ北進シツツ有リ。第二波モ同一航路上ヲ航行スル模様」

という文章が出来上がった。かつてデーニッツ元帥げんすいによつて建設された潜水艦隊——Uボート部隊は、悪化しつつある戦況にもめげず、懸命に任務を果たしていた。彼らの大部分は、敵第一波船団への襲撃を命じられている。そのため、バミューダ諸島北西の海域へ、ヴァルター機関の性能を活かして集結中らしかつた。もつとも、完璧に対応出来ている訳ではない。ヴァルター機関が持

つ欠点の一つ、燃料消費率の悪さが影響を及ぼし、単独で攻撃をかけざるをえない艦が六割近くに達すると予想されている。敵の進歩しつつある対潜技術を考えたと、船団の一割を撃沈出来たら幸運と考えなければならぬ。

——だが、第二波は違う。

—レヴィンスキーはそう思っていた。

彼も、枢軸軍の新たな船団護衛戦術が持つ効果については当然気付いている。おそらく、第二波には数隻の戦艦と重巡、場合によっては空母を付け、こちらに襲撃を断念させようとしているに違いない。

「やれますな」と、副長が言った。

彼は航海艦橋の海図台で、海図と気象予測を交互に睨みながら、これからの状況を予測していた。

「大西洋から、勢力の強い低気圧が張り出してきています。明日以降、空母からの発着艦は不可能な悪天になるでしょう」彼の顔はほころんでいた。

当然だ。ドイツ帝国海軍最大の弱点が天候の助けで打ち消され、両者の戦術的バランスはパリテイになるのだ。いや、パリテイどころではない。彼らには、この（ヒンデンブルグ）がある。たとえ日本人が戦艦を護衛に付けていても、負ける筈がなかった。この他にも（ロスバツ

ハ）と（モルトケ）、そして（バルバロッサ）がいる。それに軽巡二隻と駆逐艦四隻が出撃している。空母（イエーデ）は、おそらく途中で帰されることになるだろうが、これだけの戦力があれば、空母抜きで船団護衛部隊など恐れるに足りない。

「オットー、第二波を叩くぞ」

レヴィンスキーに、ハイエ中將が背後から機嫌の良い声をかけた。彼は今まで、航海艦橋の背後に設けられた司令官休憩室で機密電文を読んでいたのだった。

レヴィンスキーは安堵したような声で言った。

「ティーゲルシャンツェから許可が出たのですね？」

「そうだ」ハイエは肯いた。「総統閣下は、敵船団に加え、戦艦を撃破することを望んでおられる。そのような戦果が上げれば、国民への少し遅れたクリスマスプレゼントになる、ということらしい」

彼の言葉の最後には、幾らかの嘲りあざけりが含まれていた。

ハイエがナチス嫌いなのは、海軍部内では公然の秘密だった。彼は、北米艦隊がこれまで通りの戦いを行なえる最後のチャンスに出会った喜びとヒトラーの望んでいる戦果が一致したことに、奇妙な感覚を感じているらしかった。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。